

2021年度

幼児保育学科ゼミ

Report



精華女子短期大学

〒812-0886 福岡県福岡市博多区南八幡町2丁目12-1
TEL.092-591-6331 FAX.092-592-3591 <https://www.seika.ac.jp>



CONTENTS

精華女子短期大学幼児保育学科では、2年次に「保育・教職実践演習（幼稚園）」という演習科目を受講します。各自で興味・関心のあるゼミを選び、実習等の体験を踏まえてテーマを設定し、グループワーク等を通して実践的能力・専門性・研究力を高めます。

令和3年度は、下記のテーマで研究を重ねました。各ゼミの内容をまとめましたので、ぜひご覧ください。

- ①三好ゼミ 「自宅で運動会～様々な運動を引き出す運動遊び～」
- ②志方ゼミ 「障害児保育に向けた感覚遊び～様々な遊びの感覚的側面に注目して～」
- ③朝木ゼミ 「親子で楽しむふれあい遊びの紹介」
- ④古林ゼミ 「現代社会における子どもを取り巻く環境問題～保育活動と保育者の役割～」
- ⑤入江ゼミ 「『ユングの能動的想像』等を使用して、芸術・保育実践に役立つ『発展する直観力』（イマギナッティオン→インスピラッティオン→インツィツィオン＜ヌース＞）を養う演習の一つの試みについて」
- ⑥宮本ゼミ 「聴衆を想定し、音楽を演奏することを体験する中での楽しさや大変さを知り、考える。」
- ⑦元田ゼミ 「子どもの食育について～食育教材製作～」
- ⑧村井ゼミ 「心理学実験『味覚と色の関係』 黒色のお皿はチョコレートの苦みを強くするの？」
- ⑨大谷ゼミ 「子どもが楽しむペープサートについて～『さるかに合戦』と『バムとケロのそらのたび』
- ⑩田中ゼミ 「多様性のある保育についての研究～特別支援教育や海外保育、音楽実践等を通じて～」

自宅で運動会

～様々な動きを引き出す運動あそび～



ゼミ学生 市川、今村、鎌倉、白石、田畑、橋口、橋本、原田、三木、溝口、村上
指導教員 三好伸幸

●はじめに

遊びの中で様々な動きを通し、動きを獲得していくため幼児の運動遊びは重要な要素の一つになります。また、体を動かす楽しさを経験していくことが、将来的な運動習慣の形成へと繋がっていきます。しかし、新型コロナウイルスの流行に伴い、様々な制限によって子どもの遊びにも変化がみられました。現状では以前よりも、遊びに対する制限も緩和されていますが、これらの影響によって子どもの運動習慣が崩れ、運動不足など懸念されている状況です。

●目的

室内でも楽しく運動遊びができるように、様々な動きを引き出せる運動遊びの動画を作製しました。子どもたちが保護者や家族と一緒に動画での運動遊びを通して、様々な動きを体験できるようにし、子どもの発達を支援することを目的としました。

●方法

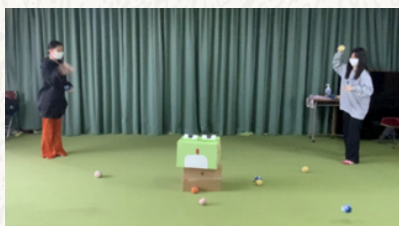
自宅にある身近なものを使い、親子や家族と一緒に遊べる「自宅で運動会」を計画しました。子どもたちの動きを引き出すために、どのような工夫が必要なのかを検討しました。

●結果・考察

「自宅で運動会」の種目は、多くの動きを引き出せるよう検討した結果、次の5種目をおこない、様々な動きを引き出すことができました。

①「どっちが先に落とせるかな!」 動き: 投げる・拾う

工夫した点: 段ボールでカエルを作り、的を作り投げる目標を分かりやすくしました。投げるボールも新聞紙を丸め作成しました。



②「タオル綱引き」 動き: 引っ張る・バランスをとる

工夫した点: はじめに、両足で踏ん張る動きで行い、展開として片足をあげることによって、よりバランス力をつかいつながりながら遊べるようにしました。



③「おしりかけっこ」 動き: 体幹

工夫した点: 風船を早く取ることをゴールとし、目標をつくりました。



④「縄くぐり」 動き: くぐる・跨ぐ・這う

工夫した点: 縄の高さなどを変えることで、色々な動きを引き出せるようにしました。



⑤「障害物競争」 動き: くぐる・高く跳ぶ・打つ・長く跳ぶ

工夫した点: 障害物の配置で動きを引き出すようにしました。

身近な物を使い工夫することで、様々な動きを引き出す運動遊びをおこなえることに気づくことができました。また、方法を少し変えるだけでも異なる動きが引き出すことができるということを学びました。

障害児保育に向けた感覚遊び

～様々な遊びの感覚的側面に注目して～



ゼミ学生 飯田、池川、大鶴、後藤、島崎、照島、三苫、安井、安河内、米原
指導教員 志方亮介

●問題と目的

志方ゼミでは、障害児の療育に有効な遊びについて学んできました。遠隔授業時の授業課題として各学生が感覚遊びを調べ、ゼミの中でプレゼンテーションを行いました。ゼミのメンバーで持ち寄り、「シェービングフォームスライム」「キラキラ塩アート」「小麦ねんど」の3つの遊びに着目して感覚遊びとしての意義を検討しました。

●方法

それぞれの遊びの説明は、以下の通りです。

【シェービングフォームスライム】

材料：シェービングフォーム、洗濯のり、ほうさ、水、食紅、絵の具

1. 容器に水とほうさを混ぜる
2. 別の容器に洗濯のりと水を混ぜる
3. 1と2とシェービングフォームを混ぜ合わせる
4. 手に馴染ませて完成



【キラキラ塩アート】

材料：水彩絵の具、クレヨン、画用紙、塩

1. 画用紙に絵を描き、絵の具を水で溶かす
2. 絵の上から絵の具を塗る
3. 絵の具が乾かないうちに塩をかけたら完成



【小麦ねんど】

材料：小麦粉、サラダ油、食紅

1. ボウルに小麦粉を入れてサラダ油を入れて混ぜる
2. 別の容器に、食紅と水を混ぜ、色水をつくる
3. 1と2を混ぜて完成



●結果と考察

それぞれの遊びについて視覚、聴覚、触覚に着目して感覚遊びとしての意義を検討しました。

【視覚的特徴】 シェービングフォームスライムの見た目は、“ツヤツヤ”としていましたが、シェービングフォームを増やすとツヤがなくなり雲のような“モフモフ”した見た目になりました。次に、塩アートについては、塩が“キラキラ”しており、塩の量によっては、輝き具合が違いました。また、室内を暗くして直接光を当てると塩の輝きが増し、分かりやすくなりました。最後に、小麦粉ねんどは、“ツルツル”しており、マットな感じでした。水分量が多いほど、小麦パンのような見た目になりました。

視覚的特徴では、見せ方の角度や光の調節具合で見え方が違ってくるため、見せるときには、部屋の明るさを変えたり紙の角度を変えたりすると変化に気づきやすいです。

【聴覚的特徴】 シェービングフォームスライムについては、シェービングフォームの量が多いと“パフパフ”と鳴り、量が少ないと、“ベチャッ”という音が鳴りました。キラキラ塩アートについては、塩を振る際に“パラパラ”と音がしました。最後に小麦粉ねんどでは、柔らかい時は特に音はしませんでした。硬い時は、“パサッ”と微かに音が聞こえました。

聴覚的特徴では、音の変化に気づきにくいいため、周りの音が聞こえないところで行ったり、聞こえやすいように耳元で聞いたりするなどの工夫が必要です。

【触覚的特徴】 シェービングフォームスライムについては、最初“ベタベタ”していましたが、触っていくうちにまとまって“プニプニ”とした触覚に変化しました。次に、キラキラ塩アートでは、塩を振ったところを筆で通ると“ザラザラ”していました。最後に、小麦粉ねんどについては、最初は、粉っぽく“パラパラ”していましたが、触っていくうちに“パサパサ”した感じになりました。

触覚的特徴では、手で触った後にどのような触り心地だったかを子どもに尋ねることで、感覚を味わう事ができると考えられます。

親子で楽しむふれあい遊びの紹介

ゼミ学生 志岐、島田、高月、高山、立石、立畑、塚本、富田、中原、長嶺、樋口、深谷
指導教員 朝木徹

●はじめに

朝木ゼミでは「親子で楽しむふれあい遊びの紹介」をテーマとして、3つのグループに分かれて学習を進めてきました。

●問題

朝木ゼミでは、親子で楽しむふれあい遊びの紹介を主なテーマとして、活動してきました。その中で、保育者の方からふれあい遊びを提案する必要性について学びました。親子でふれあい遊びをすることによって、親子で触れ合う機会をつくり愛着関係を深めることができます。しかし、保護者だけで遊びを考えて行うことが難しい場合がある為、保育者が遊びを紹介することで遊びの幅が広がります。その為、保育者は様々な遊びを紹介できるように専門知識を身に付けていく必要があります。

1グループ 「にじみ絵アート」

方法:

- ① コーヒーフィルターにペンで好きな模様を描く
- ② 水につける
- ③ 乾かす
- ④ 乾いたら、のりしろ部分を切る
- ⑤ のりしろが見えないようにじゃばら折りをする
- ⑥ 中心を持ってモールを巻きつける
- ⑦ 完成!

2グループ 「カラフル水族館」

方法:

- ① 画用紙に海の生き物を描く。
- ② ①の線に沿って切る。
- ③ 切り抜いた部分にセロハンを貼る。

3グループ 「手形アート」

方法:

- ①用意したスタンプ（または絵具）を手の平に塗ります。
- ②スタンプ（または絵具）が付いた手を画用紙に押しつけます。
- ③水で濡らしたおしぼりで手を拭き、手に付いているインクを落とします。
- ④手形をしっかりと乾かします。乾いたらクレヨンや画用紙、ペンやシールなどを使い、手形に飾りつけをします。
- ⑤飾りつけができれば、完成です。

●まとめ

朝木ゼミの活動を通して、子育て支援の視点から保育者に必要な知識や技術を身につけるために大切なことが2つあると分かりました。1つ目は、親子が一緒に活動できる遊びを保育者が提案・提供していくことです。近年、スマホやタブレットを使った子育てが増えてきており、体を動かし、製作遊びをする時間が減ってきています。そのため、保育者が子どもの年齢に合った遊びを考え、保護者も一緒に楽しく活動できるよう、親が子どもに向き合うきっかけを作ること保育者の役割だと感じました。2つ目は、保育者として保護者と子どもがふれ合う機会を作ることです。普段、保護者と子どものふれ合う時間が少なくなってきています。保育者は、遊びを通してコミュニケーションやスキップが取れるように見守り、援助する必要があると考えます。また、保護者と子どもの愛着関係を深めることができます。保育者として働いた際、遊びを通して保護者と子どもの時間を大切にできるようにしたいです。また、園・地域・保護者と連携しながら、子どもがより良い環境の中で健やかに育っていけるように保育を行っていきたいと考えています。



現代社会における子どもを取り巻く環境問題 ～保育活動と保育者の役割～



ゼミ学生 有衛、甲斐、菊川、小柳、坂本、篠原、園川、園田、谷ノ口、豊増、中林、名城、保坂
指導教員 古林ゆり

●はじめに

現代社会における問題の一つとして、子どもの自然体験の回数は減少傾向にあるといわれています。その原因として、都市化で自然が少なくなっていることや、テレビやゲームなど外へ出なくても子どもの興味を引く遊びが数多くあります。室内遊びが昔より充実し、わざわざ外で遊びたいと思わなくなってしまう可能性が考えられます。

また、2021年は昨年に引き続き、新型コロナウイルスの影響で子どもたちの遊びが変化しつつあります。さらに、これまで通常行われていた、保育園や幼稚園等での行事がなくなったことにより、体験の機会が減少しています。

私たちのゼミでは、子どもたちが室内でも自然に触れ合いながら遊べる場面を増やし、実体験を通して自らの感覚を豊かにできるような保育活動が必要ではないかと考えました。そこで、身近な環境を活かし、栽培から調理までの活動や製作活動等によって、自らの保育実践力を高めることを目的に研究を行いました。

●方法

私たち自身が、自然と触れ合い、多様な自然体験を通して感覚・感性を豊かにするために、ハーブの栽培、食育活動、花壇の整備、稲作、身近な自然物を使った製作を行いました。

また「南区子ども大学」(オンデマンド配信)では、自然物を使って「クチナシ染め」を行い、色々な模様のハンカチ作りを行いました。実際に子どもたちと触れ合いながら活動は行えませんでした。準備や手順を考えるなどの保育技術や協調性を高めました。

<1年間の主な活動内容>

- ・ハーブの栽培、食育活動(ハーブソルト)



- ・南区子ども大学；自然物を使った染色体験(クチナシ染物)



- ・1年を通じた稲作(もち米の栽培、稲刈り、餅つき)
- ・自然物を使った製作(アロマワックス・クリスマスリースづくり)
- ・活動報告のためのレポートおよびパワーポイントづくりなど



●結果と考察

今回の活動を通してSDGsについて知識を深め、どのように保育に生かせるかを考えました。身近な自然への関心や愛情を高めながら、四季の変化を感じていく大切さを学ぶことができました。また、田植えから餅つきなど、1年間を通して自然の恵みを感じ、自然を守り大切にしていこう姿勢が身についたと思います。

ゼミで体験した様々な活動を通して、身についた知識や技術を活かし、自然活動の楽しさや面白さ、自然を大切にする気持ちを伝えていけるような保育者になりたいと思います。



ゼミ学生 牧野、柏、松岡、河本、池田、大野、平野、深堀、矢野、山下、山田
指導教員 入江良英

●問題と目的

「能動的想像法」とは、意識的に無意識のイメージを掘り下げる手法である。ユングは人間の心の成長過程を「個性化の過程」と呼ぶ。日本のユング心理学では、その心理療法において「箱庭療法」を積極的に取り入れている河合隼雄の影響が極めて大きい。またゼミ授業では、「能動的想像法」の実践事例として樋口和彦が始めた「ファンタジーグループ」を行った。結論的に言うと、学生は未だ個性化の道程を歩むには精神的に幼すぎると感じられた（防衛機制が強すぎる）が、それでも「個性化の入口」ぐらいは覗いたように思われる。「教育」とは人間の「社会化」と「個性化」を同時に達成する試みである。そしてこの過程を経ることで、その人のもつ「直観力」は、例えばR.シュタイナーによると、imagination→inspiration→intuitionへと発展していく。imagination(想像力)から客観性をもつinspirationを通じて、直観＝真実とでも呼ぶべきintuition(＝ヌース)へと発展していく。この直観を発展させていく「能動的想像」の方法として、上記の「ファンタジーグループ」以外に、「仮面づくり」、各人の「モノリザ(知恵の象徴)」等を描いてもらったりした。こういう活動が多少なりとも学生の直観力開発の導入になったと思われる。またゼミ発表の「三匹の子豚(前編ペープサート+後編影絵)」という創造的な学生の催し物(表現)へと結実していった。

●方法(様々な写真で見るゼミ教育方法)

- ①劇「脚本づくり」＝物語る
- ②「仮面ダルマさん」＝「安定」という象徴を発見する
- ③ファンタジーグループ(心を解放する美術)
- ④楽器演奏経験者による即興演奏(音楽を根底から考える、頸木となる防衛機制を壊す、本当に望む音楽)

●結果と考察

入江ゼミでは、「創造的美術」という方法を基本的に学んでいる。「創造的美術の指導の原則」とは、①教師は子どもに愛情をもつこと、子どもの側に立つこと。②ユーモアを身につけること。③子どもの作品のあら拾いを止め、賞賛と励ましを与えること。④子どもを、自由な雰囲気の中に置くこと。⑤子どもが創造の仕事に励むよう動機づけをすること。⑥子どもの創造的表現を励まし、概念的表現はあまり励まさないようにすること。こどもの解放を目指すこと。そして、この「創造的美術」の道程は、たとえば、ルドルフ・シュタイナーが主張する、直観のイメージ的な段階(imagination)、直観の客観的な段階(inspiration)、そしてついに、直観がミクロコスモス(小宇宙、人間)とマクロコスモス(大宇宙、世界)が一致することで、絶対確実な段階ものとなる(intuition)。さらにこれはギリシャのアリストテレスがいう、「ヌース(直観)」や、仏教、阿弥陀仏の教え(阿弥陀との一体化)と相応するものである。ゆえに「創造的美術」とは明確には主張しえないものの、こども(人間の心を解放し、人が確実な直観(ヌース)に至れるようにする芸術療法になりえると考えられる。言い換えれば、人生の知恵を獲得することになるのである。それは悟りとも往生ともいえる。学問も科学・芸術もそれらの一助に過ぎないことを思い出すことの意義を再確認したい。前述のシュタイナーも「芸術」こそが、真の教育・人間形成を導くと考えていたのである。

参考文献

1. シュピーゲルマン,J.M.「能動的想像法」 河合隼雄他訳 1994 創元社
2. 入江良英 「一般教育」「道德教育」の根源としての『阿弥陀仏』について 2019 精華女子短期大学紀要



聴衆を想定し、音楽を演奏することを体験する中での楽しさや大変さを知り、考える。



ゼミ学生
指導教員

稲澤、井上、今長谷、植木、江口、小田、川村、北迫、坂本、佐々木、高田、福田、星野、松本
宮本幸

●はじめに

新型コロナウイルスの影響が残る中でも可能な音楽活動は何かを考え、様々な演奏動画を作成した。また、クリスマスコンサートの機会を頂き、聴く人たちが感染対策を行った上でも楽しむことができるように選曲や楽器の編成を考えてプログラムを立て、実際に演奏を行った。

●活動内容

1) 楽器演奏の体験：

ピアノを楽しく演奏することを目標にソロや連弾での体験
様々な楽器を用いた少人数でのアンサンブル

2) イベントの企画と演奏：

図書館支援委員とのコラボ企画のため、演奏動画の作成
地域の公民館でのクリスマスコンサート

●結果と考察

今年度の宮本ゼミでは、アンサンブルや連弾などの演奏動画の作成やクリスマスコンサートを実際に行うことができた。また、音楽活動だけではなく著作権について学び、演奏を動画投稿（共有）サイトで利用する場合や、楽譜のコピー等についての確認も行うことができた。様々な音楽活動を通して、私たちは人に演奏を聞いて頂く楽しさや大変さを感じ、聴く人の年代に合わせた選曲や楽器決め、演奏・構成を工夫する方法を学ぶことができた

●おわりに～活動を通して～

「知らなかった楽器を知る機会が沢山あったり、触れたことなかった楽器に触れたりしました。このことにより、子どもにたくさん
の楽器の説明や体験させることができるようになりました。」

「ゼミの1年間を振り返って、仲間と一緒にする音楽活動の楽しさを学ぶことが出来ました。また、図書支援委員とのコラボ動画やフリ

スマスコンサートを行った時に、曲決めやプログラム作成など初めて演奏する側に経つことでコンサートを開催するまでの過程や大変さを知ることが出来ました。」

「著作権についてなどを学び、演奏会を開催するための準備などの大変さを改めて感じた。連弾を通して、友達と弾く楽しさと難しさや、聴かせ方の工夫を考えるようになった。」

「アンサンブルの難しさを知りました。大人数ですと、自分が失敗しないようにとプレッシャーになり、とても震えながら演奏をしたことを覚えています。また仲間とのアレンジの仕方の話し合いの大切さや、息を合わせるために沢山の練習時間が大切だなと思いました。そして、後期ではパワーポイントの作り方について学びました。見やすい作品にするため、文字の大きさ、色、イラスト、写真を使うことで、より伝わりやすくなり、音楽を入れることで楽しい動画になったりすることを改めて知りました。」

「一人で練習して結果を出すのではなく、グループで練習し、結果を出すことの楽しさや達成感をゼミの中で学びました。新たに発見したことは、ゼミの友達の良さをたくさん見つけることができたことです。(片付けを手伝ってくれた、演奏会の構成を考えてくれた、全員お揃いのシュシュを作ってくれた、困った時助けてくれた等)」

「私はゼミでの音楽活動を通して、協調性の大切さに気づくことができました。連弾やアンサンブルでは上手いかないことが多かったですが、最後までやり遂げることができたのはお互いが同じ目標に向かって助け合いながら練習を行えたからだと思います。また、演奏を作り上げるには役割分担を行うことの大切さを学びました。役割分担をきちんとしておくことで、一人ひとりの負担が軽減されて演奏の練習もスムーズに進むと感じたので、完璧な演奏にするためにも人任せにせず個々が責任感を持って役割を果たしていく必要があると思いました。」



ため蔵@福岡市南区【公式】 @tamezoh_fmnamami・12月23日
宮竹公民館の交流ルーム「お茶しません家」のクリスマスコンサートに行ってきたぞう♪
交流ルームの運営に関わっている精華女子短期大学幼児保育学科の学生さんの演奏を、校区の皆さんも一緒に聴いていました♪
僕も一緒に聴いていて、心が温まったなあ😊



子どもの食育について ～食育教材製作～

ゼミ学生 泉、是永、最所、小代、末藤、福田(琳)、前田、山口(彩)、山口(七)、山口(真)、横山
指導教員 元田幸代

●はじめに

保育園や幼稚園での実習で子どもたちの食事の様子を見たり援助を行ったりした際、好き嫌いがある子どもや少食の子どもがいた。その中で好き嫌いをする子どもへの援助の難しさを実感した。

食材について知ることにより、食べてみようという意欲の喚起につながると考え、子どもが食材に興味、親しみがもてるようなパネルシアターを検討し、製作を行った。

●方法

文献、インターネットを用いて食に関する情報を調べ、パネルシアター製作を行った。

●結果と考察

・ストーリーの組み立て

子どもたちが食材に興味、親しみを持つことができるように、ねらいを「様々な食材の特徴、生産地（採れる場所）、一つの料理にも多くの人がかかわってできていることを知る」とし、次のことを検討した。

- ・子どもたちが主人公に親しみがもてるように、子どもたちと同年代の子どもを主人公にする。
- ・食材がどこで生産されているか（採れるか）、また、色々な人が食材の生産にかかわっていることがわかるように食材は店で買うのではなく、生産者のところに貰いに行くようにする。
- ・食材の葉の形などの特徴に着目する内容を入れ、食材の特徴に気が付くことができるようにする。
- ・食材の中には、生き物の命をいただいている食材があることがわかるようにする。

・題名・対象年齢・あらすじ

パネルシアター『感謝を込めていただきます』 対象年齢：5歳児

さっちゃんがお母さんにおつかいを頼まれてカレーの具材を畑や山、牧場に行き収穫、貰ってきて、その食材でお母さんがカレーを作って食べる。

料理は子どもたちにも馴染みがあるカレーとした。その食材を生産者に貰いに行く。にんじん、玉ねぎ、じゃがいもは、畑から主人公が収穫する。収穫の場面で、に

んじん、玉ねぎ、じゃがいもは土の中で育つこと、また、その葉の形の違いを知る。にんじんは小さな種から育てたことを知る。きのこ（しめじ）を山で、牛肉を牧場でそれぞれ生産者より貰い、それぞれの食材が作られている場所を知り、また、牛肉については、牛の命をいただいていることを知る。家に帰って、主人公はお母さんにカレーを作るための食材を色々な人が作ってくれていることがわかったことを伝える。カレーができて、食べる前に、「（生産者への、命をいただいていることへの）感謝を込めていただきます」と言う。

パネルシアターを見た後に、食材の特徴、採れる場所などを子どもたちに尋ねて、振り返りを行う。

●教材の展開

今回はカレーとしたが、給食に出てくる違う献立にして物語を展開することもできる。新たな献立、食材を物語の中で取り上げることで、新しい献立、食材について子どもたちが知識を広げ、親しみを持つことができると考える。

●おわりに

パネルシアター製作を通してどのように工夫をすれば子どもたちに分かりやすく伝わるか、理解してもらえるか、楽しんでもらう事ができるか考える難しさを実感した。今回は、保育現場で実際に実践する事はできなかったが、実践するには子どもたちに食の楽しさが伝わるように自分たちが楽しみながら伝えていきたい。

食育教材を製作するにあたって、自分たちの食への理解と知識も深める事ができ、保育の現場で活かしていきたいと思う。



心理学実験「味覚と色の関係」 黒色のお皿は チョコレートの苦味を強くするのか？



ゼミ学生 朝里、猪谷、江崎、大坪、大成、河野（恵）、河野（華）、木立、讃井、中橋
指導教員 村井千寿子

●問題と目的

村井ゼミでは、心理学をテーマに自分たちで研究のアイデアを決めて実験を行いました。今年度は「味覚と色の関係」がテーマです。実験では、お皿の色で味の感じ方は変わるのかを調べるため、黒色と白色のお皿で同じチョコレートを食べてもらい味覚評価をしてもらいました。もし、お皿の色が味覚に影響するならば、黒いお皿の方がよりそのチョコレートを苦いと感じると予想し、実際に実験で調べてみました。

●方法

短大生（23名）を対象に調査を行いました。調査では、同じチョコレートを白色のお皿、黒色のお皿のそれぞれで食べてもらい味を評価してもらいました。評価には質問紙を使い、「苦味」・「酸味」・「香り」・「なめらかさ」「濃厚さ」の5項目に5段階評価（5：強く感じる～1：全く感じない）で答えてもらいました。

●結果と考察

実験の結果、お皿の色によってチョコレートの味の評価に違いがあり、白いお皿に比べて黒いお皿の方が苦味を感じやすいという結果でした。実験の結果から、予想した通り、黒いお皿の方がチョコレートの苦味を強く感じる事が分かりました。この結果から、お皿の色という、味には関係のなさそうな視覚の情報が実は味覚に影響していることを報告しました。

●ゼミ活動を通して

「このゼミを通して、人それぞれの考え方があって必ず正解というものはないんだと学びました。これからも、疑問に思ったことは自分でできる範囲で研究をしてみよう解決していきたいなと思います。」

「様々な人に実験してみて、結果をまとめてグラフで見ると、しっかり味の感じ方に違いが出ていてとても面白くて、お皿の色が味に影響することがわかりました。楽しく簡単に誰でもできる実験だったのでよかったと思います。次は、匂いなど違う心理学実験もしてみたいです。」

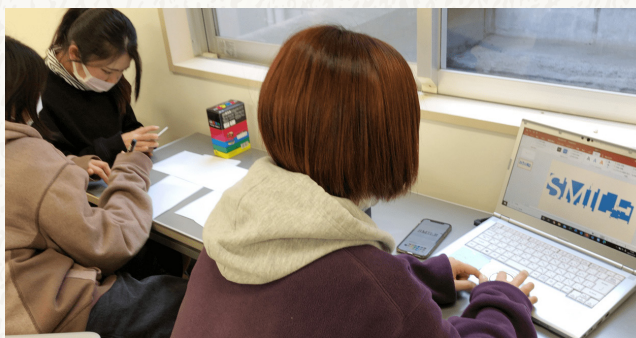
「心理学のゼミ活動をして、自分の興味関心のあることをお互いに意見を出し合い、実際に実験をして結果を出すことの楽しさを学びました。」

「最初は、先輩たちのように心理学実験を行い無事に活動報告まで終われるのか少し不安に感じていた部分もありましたが、みんなと協力して分担し、活動報告まで行えたので自分自身楽しみながらゼミの活動に取り組むことが出来ました。」

「ゼミ発表会の動画では自分たちのゼミの事だけでなく他のゼミの発表を見ることで、それぞれのゼミが学習した内容を知ることができ、保育に役立ちそうなことも知ることができて、オンラインだったけど行えて良かったなと思います。」

「後期のゼミでは、心理学に関する疑問や研究したいことを自分で見つけ出し、調べてみる力が身についたと思います。」

「前期のゼミは先生が決めたテーマに基づいて皆で実験とそのまとめを行うことが多かったのに対して、後期のゼミでは学生が中心となって活動することが多かったのですが、後期のゼミが始まる前は「自分たちで実験をするなんて難しそう。私にはそんなことできない」と思っていました。そのため、後期のゼミが始まるのを少しだけ憂鬱に感じていました。後期のゼミが始まると、学園祭に向けた動画作りやチョコレートの心理学実験の活動を行いました。錯視の面白さを伝えることや見やすい動画を作ることなど、ゼミの活動では様々な場面で難しさを感じましたが、振り返ってみるととても貴重な経験をさせて頂けたし何より楽しかったです。」



子どもが楽しむペープサートについて

～「さるかに合戦」と「バムとケロのそらのたび」～



ゼミ学生
指導教員

阿比留、天久、安藤、岡崎、富永、中石、長尾、西竹、原田（梨）、樋口（結）、瀧上、山本
大谷朝

●問題

ペープサートは子どもたちが大好きな保育教材である。ペープサートは、一般的に紙で登場人物や道具を製作し、背景を立てて、一人で紙人形を動かして実演することが多い。私たちは、もっと躍動感を出したいと思い、全員で大型ペープサートを製作することにした。また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、保育現場で動画も活用されるようになってきた。子どもたちと直接関わることでできない状況でも十分に楽しめるように、実演を工夫し、動画を作成した。

●方法

①ペープサート「さるかに合戦」

「かにむかし」や「カニの仇討」という昔話をもとに、自分たちで台本を作成し、登場人物もデザインした。

・製作過程での工夫

登場人物の動きに躍動感が出せるように、棒を取り付ける位置を工夫したり、針金で微細な動きを表現できるようにした。また、柿の実が色づく様子は、ビニールシートを活用し、めくる動きで変化を表現できるようにした。

・実演の工夫

猿が柿の実をカニに投げる場面では、実際にカニにあたるように柿の実を投げることにした。動画を撮影する際には、柿の木を机に置き、柿の実を横から投げるなど、平らにすることで躍動感が伝わりやすくなるようにした。

②大型ペープサート「バムとケロのそらのたび」

『バムとケロのそらのたび』（島田ゆか作・絵 文溪堂）は、子どもたちに親しまれてきた創作絵本シリーズの1冊である。大型ペープサートにすることで、臨場感も楽しめるのではないかと考えた。

・製作過程での工夫

登場人物は、場面によって異なる豊かな感情を表現できるように、目をマグネットで交換し、表情に変化を付けた。飛行機を針金でつるし、小道具に折本や蛇腹折りなどを活用して、躍動感とともに立体感も表現できるようにした。

・実演の工夫

背景を貼って、移動しながら実演・撮影を行った。かぼちゃ火山の噴火は、柿の木と同様に、机に置いて、平面で動きを表現し、躍動感が伝わるように動画を撮影した。

●結果・考察

ペープサートは紙人形が動くことで、登場人物の躍動感を表現することができ、内容が直接伝わりやすいため、子どもが興味を持ちやすいものだと思う。背景の変更によって画面の転換が行われ、小道具を立体的なものにすることもでき、背景や小道具の動きに工夫を加えることで、本物であるかのような臨場感を楽しむことができるようになる。ペープサートは、いろいろな工夫を凝らすことのできる児童文化財だと言える。

また、ペープサートを動画にするにあたっては、画角外から紙人形を出せればよいと、画面の上や横から登場させることができたり、背景を机に置いて撮影したり、子どもの前では直接実演できない工夫をすることができた。直接実演する場合は、保育者が見え、人間関係も築くことができるが、動画は映像として完成すれば、身近な保育者がいなくても大勢の子どもが楽しめるものとなった。



多様性のある保育についての研究

～特別支援教育や海外保育、音楽実践等を通して～



ゼミ学生
指導教員

江島、大藪、加峰、唐田、川田、栗並、小柳、則常、伯川、羽田、林田、馬場、平山、安永
田中佑樹

●はじめに

近年、多様性のある保育のあり方が求められている。保育現場においても、さまざまな障がい・特性をもつ子どもや、他国籍の子どもが在籍していることから、私たちのゼミでは、多様なニーズに応えられる保育者になるべく、主に特別支援教育、英語の手遊びや海外保育、音楽実践活動について研究を行った。

●方法

1. 特別支援教育

特別支援学校に勤務されている方々をゲストティーチャーとして迎え、知的障がいや聴覚障がいについてオンラインで話を伺った。障がいの特性や具体的な教材・支援方法等を学んだうえで保育に活かすことのできる活動について考え、知育教材「形・色分け教材」の製作と、手話を用いた歌唱活動を行った。

2. 英語の手遊びや海外保育

授業の始まりに英語の手遊びを行うことで、英語や諸外国の子どもの歌について知識を深めた。また、担当教員と海外在住の方とのオンデマンド動画を視聴して、日本で有名な童謡は諸外国でも有名なのか比較した。その他、各自で興味のある国の保育と日本の保育の違いや特徴について調べた。

3. 音楽実践活動

近隣の公民館にて、地域の子ども達を対象に、40分間のうた遊びの実践を行った。幅広い年齢の子に参加してもらえよう、手作り楽器製作では、楽器自体は製作しておき、当日子ども達が自由にシールを貼って飾り付けできるよう工夫した。

【プログラム】

1. 入場（ミッキーマウスマーチ）
2. ペーパーサートシルエットクイズ
3. 手遊び（キャベツの中から）
4. 大型絵本+歌（はらぺこあおむし）
5. 手作り楽器製作（シェイカー）
6. 手遊び+演奏（幸せなら手をたたこう）
7. 終わりのあいさつ

●結果・考察

1. 特別支援教育

知育教材「形・色分け教材」の製作では、視覚的支援を考えることで見通しをもって活動に参加できるよう工夫した。教材作りにおいて、対象児の好きなものを取り入れることが集中力の持続に繋がることから、子どもの実態把握を正確に行うことが大切だと学んだ。

手話では、「さんぽ」を手話付きで歌う実践を行った。手話には、ちょっとした手や指先の動きで意味の異なるものがあるため、細かい動きに留意して取り組んだ。実践してみることで、手話を身近なものとして感じるできるようになった。

2. 英語の手遊びや海外保育

英語の手遊びは、どれも簡単な英語の歌詞で繰り返しが多いため頭に残りやすく、歌を知らない子ども達とも一緒に楽しめそうだと感じた。日本の有名な童謡の中には、「きらきら星」等海外から来たものがあるが、実際に現地の子ども達にも歌われているものと、メロディすらあまり知られておらず、日本国内とは差があるものがあることもわかった。

そして、日本の保育と海外の保育との違いについて各自で調べた結果、国の方針や文化的背景によって保育・教育制度や保育環境に違いがあることを知り、それぞれの保育のよさや特徴についても考えることができた。

3. 音楽実践活動

今回、対象年齢が幅広かったことから、誰でも楽しめる音楽活動を目指して計画・実践を行った。当日は、音楽表現における完成度の高さのほか、表情やジェスチャーといった非言語的コミュニケーションを大切にしよう心がけ、それぞれの持ち味である明るい雰囲気や臨機応変に対応できる力を活かすことができた時間であった。

この活動全体を通して、グループだからこそできることや仲間と一緒に活動できる心強さや達成感を実感できた一方で、大人数がゆえの時間の確保の難しさやコミュニケーションの取り方等の改善点も見つかった。今後保育者となった際には、これら全ての経験を活かしていきたい。

